

【全体概要】 本県では、純米酒、本醸造酒の用途向けに「レイホウ」が栽培されてきたが、種子供給の見通しが立たなくなってきたことから、これに替わる品種として、耐倒伏性に優れやや多収で醸造適性も高い酒造好適米品種「華錦」が育成された。

そこで、農業革新支援専門員が普及指導員、JA技術員と連携して栽培実証展示ほを設置し、「華錦」の栽培技術を確立する。併せて、実需者である酒造業界とも連携して「華錦」の普及定着を図る。

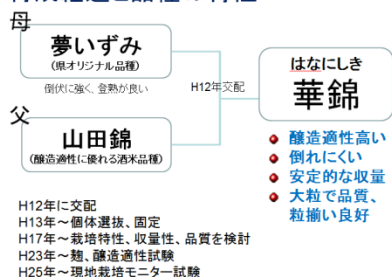
新品種・新技術等の概要

酒造好適米「華錦」は、熊本県農業研究センターが、精米、麴及び醸造適性について検討を重ねてきた品種で、これまでの結果から醸造用として高い評価を得ており、醸造適性についての支障はないと考えている。

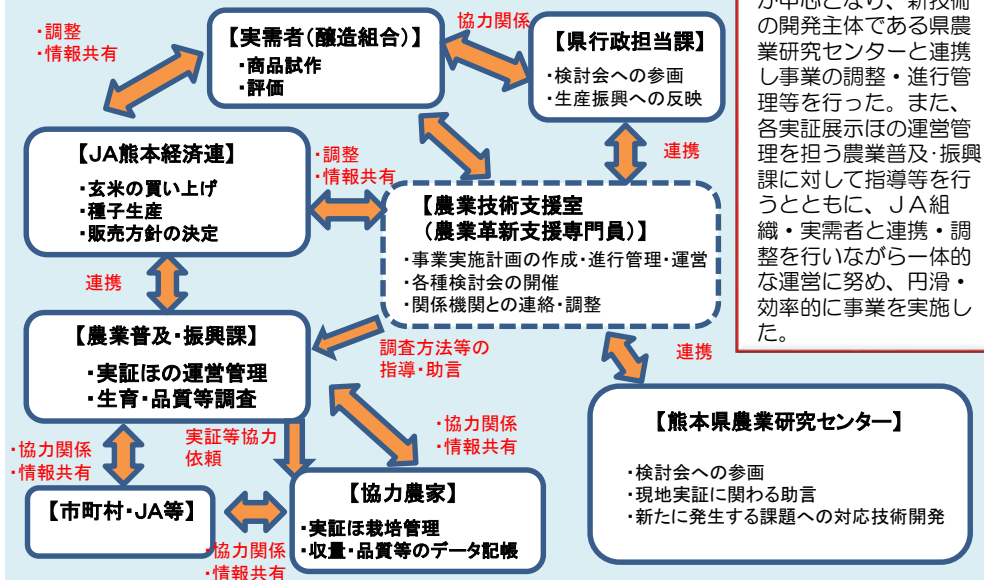
また、従来の酒米品種に比べ短稈で耐倒伏性に優れ、安定した収量を確保できるなど、栽培特性も優れている。

さらに、農家所得の向上だけでなく、酒造好適米の供給不足の改善や酒造適正に優れる酒米を使用できる点において酒造業界にとっても有利な品種であり、生産者にとっても多角的な生産が期待できる。

育成経過と品種の特性



コンソーシアム候補の体制図



農業革新支援専門員が中心となり、新技術の開発主体である県農業研究センターと連携し事業の調整・進行管理等を行った。また、各実証展示ほの運営管理を担う農業普及・振興課に対して指導等を行うとともに、JA組織・実需者と連携・調整を行いながら一体的な運営に努め、円滑・効率的に事業を実施した。

主な取組内容

農業技術支援室(農業革新支援専門員)が中心となり普及指導員、試験研究センター、JA熊本経済連、JA技術員と連携し産地で栽培実証を行うとともに、醸造メーカー等の関係団体とも連動しながら、「華錦」の普及定着を促進させる取り組みを行った。

- ・平坦・高冷地の2地域に各1箇所に展示ほを設置
- ・生育や収量、及び品質調査を行い、そのデータや試験研究機関の既存成績を基に栽培マニュアルを作成



実績と今後の展開

事業を活用して「華錦」栽培マニュアルを作成し、展示ほ現地検討会等を通して技術の高位安定化を図った結果、H27年は栽培面積8.5ha(H26年0ha)、単収523kg/10a(同上500kg/10a)の実績であった。また、コンソーシアム候補を通じて実需者である清酒メーカーとの連携を図った結果、「華錦」を原料として取り扱うメーカーも8社となり、H28年秋には「華錦」を使用した各社の新製品が出そろう予定である。

今後は、醸造適性に大きく関わる蒸米消化性と登熟期の気温の相関を解析し、より高品質な酒造好適米生産のための栽培技術の改善と普及に取り組む。